文芸批評の計量解析による批評行為の背景的特徴の抽出

Extracting Background Knowledge About Critics Through Numerical Analysis of Literary Reviews

村井源^{1*}, 往住彰文¹

Hajime MURAI, Akifumi TOKOSUMI

*1 東京工業大学大学院社会理工学研究科

Graduate School of Decision Science and Technology, Tokyo Institute of Technology

〒152-8552 東京都目黒区大岡山2-12-1-W9-48

E-mail: {h_murai, akt}@valdes.titech.ac.jp

本研究では、テキストを解釈し批評する行為を科学的にとらえるためのケーススタディとして、著名な文芸批評家個人の批評テキストを網羅的に収集し、計量的な分析を行った。テキスト中の評価的語彙の共起情報の分析からは、「新しさ」「美しさ」「深さ」などが重要であることが分かった。また、テキスト中の人名から、批評家が影響を強く受けている作家・思想家を分析し、テキストの評価軸となる思想的な背景を抽出することができた。

In order to scientifically investigate the cognitive processes of interpreting and evaluating texts, as a case study, this paper collects and numerically analyzes some literary reviews written by a famous critic. The results of co-occurrence analysis for evaluative vocabulary revealed ‘newness’, ‘beauty’ and ‘depth’ to be important. Moreover, by extracting individual names from the texts and detecting influential writers and philosophers, it was also possible to extract the background knowledge and philosophical characteristics that shape the standards of text evaluation.

キーワード: 書評, ネットワーク, 共起単語

Book review, network, co-occurrence

1 はじめに

テキスト読解における情報処理過程は、主に心理学や認知科学の分野において、その解明が進められてきた。文字を単語として認識し、単語を文節やセンテンス

レベルに構造化し、センテンス間の修辞関係や論理的关系を認識するという多段階の並行的なメカニズムは非常に複雑である。テキストの読解にはコンテキストの理解の問題も含まれるため、現在まで多くの研究が進められているものの未だ

解明されていない点も少なくない。

一方で、テキスト読解の後に続く評価と批評の認知プロセスもまた複雑である。テキスト批評の認知メカニズムは、何をもって批評と言いうるかという根源的な問題も含めて端緒についたばかりである[1]が批評において重要視される概念の関係性についてはジャンルごとの特徴が抽出されている[2]。

読解及び批評には種々のコンテキスト情報が必要となることが一般に知られている。しかし科学的にテキストの読解を理解するためには、具体的にどのようなコンテキスト情報が必要となるかに関してはいまだ明確にされていない。また、テキスト読解においては、哲学・思想的背景に基づく様々な批評法が用いられ、新しい思想パラダイムの出現とともに、新しい批評が誕生することが少なくない。

本研究においては、未だ未解明の点の多い批評の認知メカニズムを探るため、批評において必要となる背景的な思想に対応する価値観と、コンテキスト情報に対応する知識がどのようなものであるかを計量的に抽出することを目的とする。ただし、一般的な背景の価値観や背景のコンテキスト情報の網羅的な抽出は困難であるため、本研究においては一人文芸批評家の批評テキストに焦点を絞って、ケーススタディ的に背景情報の抽出を行い、結果の妥当性を考察する。

2 対象となる批評文テキスト

本研究が対象とする批評文テキストのデータは、文芸批評家、井口時雄氏[3]の文芸批評に関連する、メディアに掲載されたテキストを収集し電子化したもの

である。年代は1983年から2009年までであり、テキスト数は396、全体のテキストサイズは 2.96MBとなっている。表1には年代と形式ごとの数を示した。

表1 対象テキスト数

	1980年代	1990年代	2000年代	合計
解説	0	9	14	23
書評	52	110	69	231
作家論	12	17	23	52
文学・批評論	3	19	25	47
エッセイ	11	27	5	43
合計	78	182	136	396

3 批評文の感性的側面

テキストに含まれる概念構造としては、内容的側面と感性的側面の両面が考えられるが[4]、感性的側面を表す要素としては形容詞が考えられる。そこで形容詞の頻出語彙の共起ネットワークを作成して形容詞によって示される批評文中の感性的な側面の特徴を図示する。図1には全批評テキストの形容詞共起ネットワークを示した。頻出語彙の影響を可視化するため、図でのノードのフォントサイズは、単語の出現頻度の二乗根に比例している。また、孤立ノードは割愛した。以下の図では、可視性のため語彙間共起頻度上位約50までをエッジとして描画している。

図1のネットワークにおける中心性を計量的に分析するため、UCINETを用いて計算した結果の各中心性の値が上位10位に入った語彙を表2に示す。

図1および表2の結果より、対象批評テキスト中で中心的な役割を果たす評価尺度は（「よい」が評価尺度であるのは当然であるので）、「新しい」「美しい」「深い」などであると分かる。文芸批評においては対象となるテキストが何らか

図1 全テキスト中での形容詞の共起ネットワーク

の意味で「新しい」要素を持っており、文章表現等に「美しさ」があり、対象を「深く」分析し、描けているかという点が問われているのだと考えられよう。

表2 全テキスト中での形容詞の中心性

Closeness		Betweenness		Eigenvector	
新しい	9.11	新しい	50.04	美しい	67.06
よい	8.98	よい	37.10	新しい	66.74
美しい	8.79	深い	33.73	若い	50.63
深い	8.76	明るい	28.16	悲しい	44.81
若い	8.70	暗い	27.61	切ない	37.56
正しい	8.62	美しい	24.63	よい	29.16
古い	8.56	悲しい	15.45	正しい	29.02
暗い	8.47	正しい	15.45	古い	22.94
いさぎよい	8.47	軽い	12.24	醜い	20.42
悲しい	8.36	若い	9.57	いさぎよい	20.33

このような批評における感性的な評価軸であるが、文芸批評家間で異なることは当然ながら、同じ批評家の中でも時期によって異なりうる。本研究での対象とする文芸批評家の場合、1980年代・1990

年代・2000年代で中心的な形容詞がどのように変化するかを上位5位のみそれぞれ表3から表5に示す。表3で中心的なのは「若い」という語彙だが、表4では「新しい」と「美しい」の中心性が高く、表5においては「深い」「正しい」「悪い」と時代によって大きく変化している様子がうかがえる。「若さ」「新しさ」を重視した時代から、次第に内面的な対象の分析の深さを重視するように変化した中で善悪の問題がクローズアップされてきた価値観の変化の様子が分かる。

表3 1980年代テキスト中での形容詞の中心性

Closeness		Betweenness		Eigenvector	
若い	57.50	若い	54.69	若い	71.16
美しい	46.00	白い	22.50	悪い	42.24
悪い	46.00	深い	19.76	白い	40.82
白い	46.00	短い	18.52	明るい	40.24
新しい	44.23	新しい	18.21	新しい	40.10

表4 1990年代テキスト中での形容詞の中心性

Closeness		Betweenness		Eigenvector	
新しい	43.04	よい	23.37	新しい	58.58
よい	39.08	大きい	21.73	美しい	50.27
美しい	38.64	新しい	21.13	若い	42.16
古い	38.20	美しい	21.00	正しい	41.41
大きい	38.20	長い	20.74	大きい	39.85

表5 2000年代テキスト中での形容詞の中心性

Closeness		Betweenness		Eigenvector	
深い	9.71	深い	23.68	深い	52.21
正しい	9.62	正しい	19.69	軽い	46.21
悪い	9.51	悪い	18.20	若い	45.26
若い	9.47	若い	17.66	暗い	38.81
新しい	9.41	新しい	15.62	正しい	38.38

4 批評対象となる動作

形容詞の分析と同様の手法を用いて、動詞の使用の特徴を分析する。動詞利用の特徴によって明らかとなるのは、批評で中心的な対象となる「行為」である。まずテキスト全体での共起ネットワークを図2に示す。また図2のネットワークにおける中心性の計算結果を表6に示す。

図2 全テキスト中での動詞の共起ネットワーク

表6 全テキスト中での動詞の中心性

Closeness		Betweenness		Eigenvector	
書く	10.83	書く	35.41	書く	69.89
思う	10.63	思う	12.70	思う	61.04
語る	10.43	見る	9.31	語る	42.66
見る	10.40	語る	5.78	見る	39.01
読む	10.30	読む	5.48	読む	34.40
呼ぶ	10.30	呼ぶ	4.93	生きる	31.69
生きる	10.27	生きる	1.55	呼ぶ	31.42
言う	10.24	知る	0.59	知る	28.54
考える	10.21			考える	27.97
しれる	10.15			言う	27.38

図2および表6より、「書き」「語る」行為の結果を、「見て」「読み」，それについて「思う」ということが批評行為の中心的作業であることが考察される。他の動詞もほぼ直接的に批評行為自体に関連しているが、「生きる」だけが例外的な意味概念を持つ。対象テキスト中の「生きる」の用例としては、どのように言葉を「書き」「語る」かがどのように「生きる」かであると記述している箇所が複数あり，そのような言語行為全体に対する筆者の特徴的な姿勢が現れていると考えられる。

5 作家・批評家間の関連性

文芸批評においては文学作品だけではなく、批評テキスト自体もまた文芸批評の対象となる。本研究の対象テキスト中で批評対象となった文学者・批評家を表7に上位10位まで記す。全テキスト中で単純出現回数順と、出現テキスト数での順位に分けて記述してある。また、これらの文学者・批評家のテキスト中での共起関係をネットワーク化したものを図3に示す。また批評対象となったテキストの作者のリストは表8に示す。

図3 全テキスト中での作家・批評家等の共起ネットワーク

表7 全テキスト中での文筆家の出現数

出現回数		出現テキスト数	
小林秀雄	622	小林秀雄	63
坂口安吾	555	中上健次	60
中上健次	476	三島由紀夫	59
大江健三郎	448	大江健三郎	56
太宰治	406	柄谷行人	44
江藤淳	383	坂口安吾	39
柄谷行人	359	柳田国男	39
保田與重郎	350	大岡昇平	36
柳田国男	237	江藤淳	35
永山則夫	188	中野重治	32

表8 批評対象テキストの作者

作者名	回数	作者名	回数
大江健三郎	30	江藤淳	8
中上健次	30	車谷長吉	7
柄谷行人	14	古井由吉	5
坂口安吾	11	中野重治	5
永山則夫	9	筒井康隆	5

大江・中上・坂口など批評対象となっている人物の言及が多いのは当然ながら、一度も批評対象となっていない、太宰・三島や、ドストエフスキー、マルクス、フロイトなど様々な名前がネットワーク上には現れてきている。これらが示すのは、言及回数は少なく、直接批評対象と

はしていない言外のコンテキストとして種々の古典的作品や思想系のテキストが評価メカニズムの中に深く織り込まれている可能性である。

6 背景的思想・作品

5節での結果に基づき、対象テキストが前提としている古典的作品と思想的な背景を抽出するため、人名に絞って抽出を行った。まず、文芸批評の前提となる作品であるが、作品登場人物の出現順位（出現テキスト数順）を表9に示す。

表9より、批評対象作品となっており、かつ連作であるため複数テキストで出現しやすい中上健二の『枯れ木灘』の登場人物を除くと、ドストエフスキーの作品の登場人物が有意に多いことが分かる。つまり、当該批評家は他テキストの読解において暗黙のうちにドストエフスキー的な価値観・世界観を前提として作品の理解を進めているということが強く示唆される。また、フロイト的心理的解釈との関連でギリシャ神話のオイディプスも

登場回数が多い。

次に、背景的思想を示すと考えられる思想家名の出現順位を表10に示す。

表9 頻出登場人物と出典

登場人物名	頻度	テキスト	作者	作品
ラスコーリニコフ	61	15	ドストエフスキー	『罪と罰』
龍造	172	10	中上健二	『枯れ木灘』
オイディプス	46	9		ギリシャ神話
秋幸	307	8	中上健二	『枯れ木灘』
郁男	53	8	中上健二	『枯れ木灘』
ムイシュキン	13	7	ドストエフスキー	『白痴』
イッポリート	14	6	ドストエフスキー	『白痴』

表10 頻出思想家名

思想家名	頻度	テキスト
フロイト	49	20
マルクス	66	13
ジャック・ラカン	20	11
サルトル	15	8
ルソー	25	7
カント	15	7
孔子	13	7
ニーチェ	10	7

表10より、頻度はマルクスが、出現テキスト数はフロイトが最大である。表9の結果と合わせて考えるなら、貧困と暴力（ドストエフスキー・マルクス）とコンプレックス（フロイト・オイディプス）が、対象テキストにおける背景的な重要関心事項であると考察できよう。

7 結論と今後の課題

本研究では、文芸批評家のテキストを網羅的に収集し、計量分析することで、批評における評価軸となる感性的な特徴と、批評を行う上での背景となる前提的

な知識・コンテキストがどのような文学作品と思想家によって主に構成されているのかを明らかにした。これらに結果により、テキスト解釈と批評のメカニズムを構成する計量的なデータのいくつかを明らかにすることができた。

今後は、これらの背景的価値観や前提となる文学・思想的知識などを計量的に扱うためのデータ化電子化を進めるとともに、これらがどのようにテキスト自体と相互作用して解釈と評価が行われるのかを分析していく必要がある。

謝辞

本研究は科研費「知識共有のための価値指向型オントロジーの多分野多言語化」（20300074）の助成を受けた。

参考文献

- [1] 佐藤さやか, 松本斉子, 村井源, 往住彰文: “テキストの内容分析による文芸批評の認知構造の推定”, 第10回日本感性工学会大会論文集, P01-11, 2008.
- [2] 村井源, 往住彰文: “テキスト批評の計量化に向けて—書評の計量分析—”, 情報知識学会第17回年次大会, Vol. 19, No. 2, pp. 120-125, 2009.
- [3] 井口時男: 東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授, <http://www.valdes.titech.ac.jp/~iguchi/> (2010年3月9日参照) .
- [4] 村井源, 松本斉子, 往住彰文: “コーパスに基づく感性と論理のネットワーク表現”, 日本認知科学会第25回大会発表論文集, 194-197, 2008.